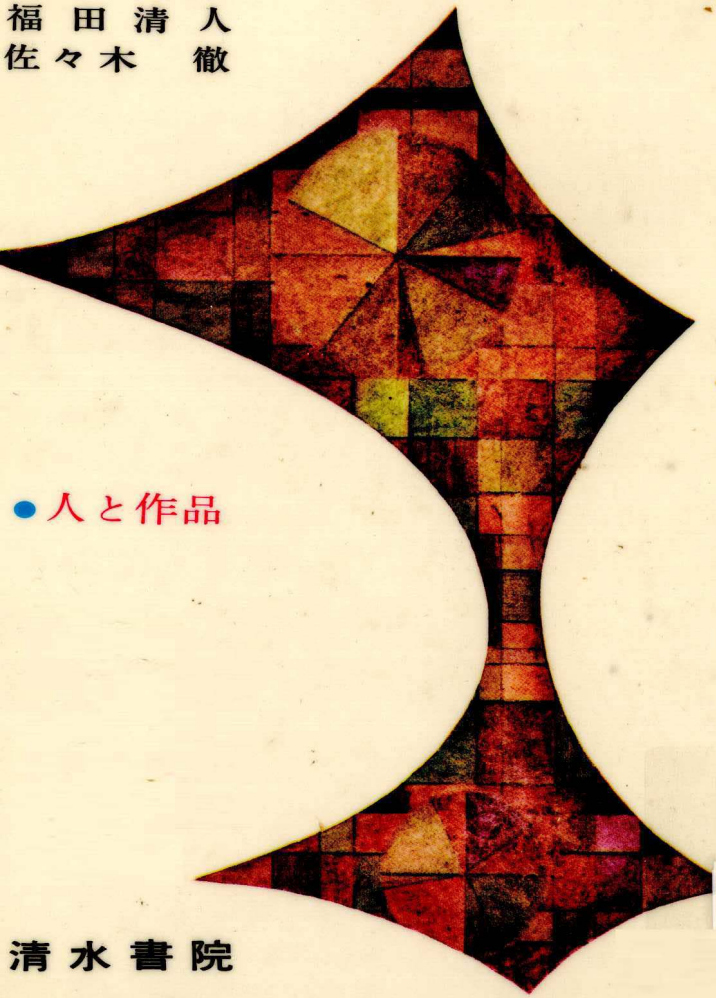
Century Books

島崎藤村

福田清人
佐々木徹



●人と作品

清水書院

島崎藤村■ 人と作品 8 定価はカバーに表示

昭和41年4月25日 第1刷発行 ©
昭和52年4月15日 第10刷発行

検印省略
落丁本・乱丁本は
おとりかえします

• 編著者……福田清人／佐々木徹
• 発行者……野村久也
• 印刷所……豊栄印刷
• 発行所／清水書院／東京都新宿区東五軒町5
Tel・東京(260)5261～6 ／振替口座・東京5283
郵便番号 162

CenturyBooks 清水書院

島崎藤村

●人と作品●

8

福田清人
佐々木徹

CenturyBooks 清水書院

原文引用の際，漢字については，
できるだけ当用漢字を使用した。

序

青春の日に史上いろいろな業績を残した人物の伝記や、あるいはすぐれた文学作品にふれることは、豊かな精神形成にもっとも役立つものである。これら伝記の中でも、美と真実を追求して、みごとな作品を残してくれた文学者の伝記は、しょせん文学は人生探求につながっていることから、ことに色々と与えてくれるものがあり、またその作品理解の鍵を手渡してくれるものである。

たまたま清水書院より、近代作家の伝記及びその主要作品を解説する「人と作品」叢書の企画について、私が相談を受けたのは昭和四十年初夏の頃のことであった。

それは読者対象を主として若い世代におき、その文学教養に資することを目標にすること、執筆陣は、既成の研究者よりも、むしろ新進の手によって、若い世代の胸にひびく内容、弾力ある文章を期待するということから、私が講義をうけもっている立教大学日本文学研究室の大学院を中心としての協力を求められた。研究室は創設以来、日は浅いが、しかし近代文学研究者で、この期待に応じうる有能の士のあることはすぐ頭に浮かんだことだし、また新人で一冊の本をまとめて出す機会は、そうざらにあるわけでもない。私はこの一見大胆で、創意ある新企画に賛成した。

書院から私が編集に当たっての人選その他一切まかせられたのであるが、叢書という形式からだいたいそ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

の構成のことは案を示して、そのほかのことはそれぞれの個性に応じて制限された三百枚という枚数のなかに自由なペンをふるってもらうことにして、編者としての責任上、その原稿には目を通した。

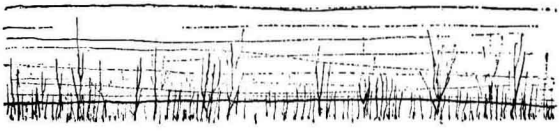
さてこの「島崎藤村」は、明治・大正・昭和三代をつらぬく巨匠である。木曽の山中から少年の日、東京に出で、明治学院に学び、ようやく文学への道を進んでは詩から散文へと真実一路の歩みを着実に進んだ。その詩集は、近代の新声であったばかりでなく、大正末期、若い日を送った私なども愛誦したものであり、今日の若い世代の胸にひびくものがあり、愛読されている。また、「破戒」「春」「桜の実の熟する時」等々、その作品は若い人々の愛読する半古典的作品でもある。

ところで藤村については、すでに多くのすぐれた評伝がでているわけであるが、この筆者、佐々木徹君は、よく原典を味読し、また、研究書をあさり、ここに若い世代の藤村文学入門書としてまことに手頃なこの一書をまとめあげた。

佐々木君は、近代自然主義文学研究を研究室の助手をつとめつつ大学院の博士課程でつづけており、学部での卒業論文は徳田秋声、修士論文は正宗白鳥で、ここにわが国の自然主義三大家の一人島崎藤村について執筆するには、ふさわしい研究者である。なお、同君はすでに高校の講師として若い人々に接したことがあり、その経験も、本書の中に生かされて若い人にアピールするものがあるであろう。

立教大学日本文学研究室にて

福田清人



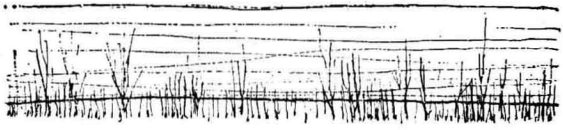
目次

第一編　島崎藤村の生涯

木曽馬篭と東京……八
悩める青春の心……二五
青春の詩……三七
自然主義文学の成立……六一
パリの前後……七七
大家の風格……九八

第二編　作品と解説

藤村詩集……一一〇
千曲川のスケッチ……一三六
破戒……一四五



春……一五四
家……一六〇
桜の実の熟する時……一七〇
短編集『嵐』……一七五
夜明け前……一八一
まとめとして……一九六

年　譜……二〇一
参考文献……二〇八
さくいん……二〇九

第一編　島崎藤村の生涯

木曽馬篭と東京

――山の村から文明開化の巷へ――

「木曽路はすべて山の中である。あるところは岨づたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曽川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐた」

これは、不朽の名作『夜明け前』の冒頭の一節である。島崎藤村は、まず右のように、おもな舞台となる木曽の雄大な風土を印象的に説明してから、大長編の物語りを悠々とすすめたのであったが、ここが、藤村自身の生まれ故郷でもあった。

木曽路の一宿駅であった馬篭、ここには今でも島崎氏の係累が居住している。しかし、藤村が馬篭に暮らした期間は短く、少年時代にさしかかろうとするころには、もう他郷で過ごす身となっていたのであった。その意味からすると、藤村と故郷の結びつきはいたって希薄なように思われる。ところが、わずか数年間を過ごしたにすぎなかった木曽の風土が、実は藤村の人間性を形成し、その文学を根底から支配していたのである。

藤村は、自己の生命の源をこの木曽山中の自然や風物・伝統などにもとめ、その文学は、つねに、故郷か

ら養われた思想と生命力によって生み出されていた。とすれば、木曽の自然とは、藤村の幼年時代とは、いったいどんなものであったのか。まず、この点からながめて行こう。

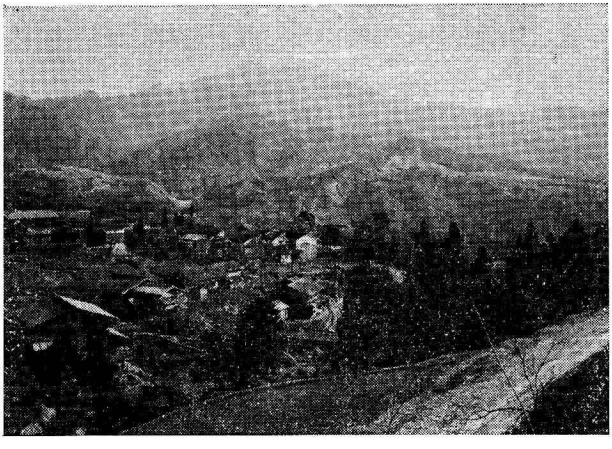
木曽馬篭

「木曽路はすべて山の中である」と書かれた木曽路は、東山道の一部であった。東山道は中仙道ともいわれ、南の東海道と北の北陸道の中間を走る、江戸と京都を結ぶ重要な交通路であり、往来は東海道についで盛んであった。木曽路はその東山道のうち、美濃（岐阜県）と信濃（長野県）の国境にある十曲峠から、木曽谷と伊那盆地の分岐点桜沢橋に至る約八十キロメートルをさし、ここに藤村の生地馬篭を含む木曽十一宿があって、徳川時代は尾張藩の支配下にあった。

木曽路の歴史は古く、七百二年に開かれたものであるといわれている。その後幾度かの変革を経て、江戸時代の東山道隆盛の時代をむかえたが、明治二十五年には、自然の作った旧街道の険しい要害の地をさけて、木曽川沿いに迂回する国道に変わり、さらに明治四十四年には中央線の鉄道が敷かれたので、明治以後は見るかげもなくさびれてしまった。

馬篭は、十一宿中の十曲峠寄り、つまり木曽路南端の最も京都に近い方角に位置していたが、その変革は木曽路とともに歩んでいた。だから、東山道全盛の時代には、東西交通の重要な宿駅として、大名行列や旅人の行き来を送り迎えして大いににぎわった馬篭も、明治維新後の宿駅廃止以来、国道新設、鉄道施設と、そのたびにさびれる一方であった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert



恵那山を望む

それにもまして、木曽という所は元来が山深い寒村の多い所である。馬篭が木曽路の最南端に位置するといっても、そこは北アルプスの一角であり、飛騨・木曽の二大山脈にはさまれ、木曽川に沿った谷の両傾斜には、桧木・椹・高野槇・ねずこ・あすなろうのいわゆる木曽五木がおい繁る文字通りの大森林地帯であった。街道は山肌をぬって曲がりくねり、その両側に石垣を築いて民家を建ててあるような所で、塀は板を用いて囲い、板屋根には、いつでも風雪を防ぐための石の重しがのせてあった。田畑はいうまでもなく少なく、人々はなかば山林にたよって生計をたてていた。

それは、この地方がいかに厳しい自然条件の中に位置した寒村であったかを、如実に物語っているのである。このことをよく理解すれば、藤村の、『夜明け前』に代表される、あの雄大でがっしりした、いかにも厳格な文学がなぜ成立したかということも、なるほどとうなずけるであろう。

しかも、明治五年（一八七二）三月二十五日、島崎春樹、

すなわち藤村が生まれた時、木曽路はすでにさびれ始めたころであった。宿場は廃止され、昔日の大名行列もなかった。だから、春樹はかつての華やかさを知らなかった。さびれゆく宿場で、それを抱きこんでいる大自然が幾星霜変わらずにくり返した、深い恵みと厳しい責め、ただそれだけしか知らなかった。雄大で、厳格で、素朴で、物怖じしない、それでいてどこか緻密に行きとどいた文学が生まれたのも、春樹が、木曽の自然の雄大さ、厳格さ、素朴さ、緻密さを吸収しながら成長した過程を考えれば至極当然のことといわなければならない。

しかし、それだけではない。もう一つ、彼の人間性を培い、その文学を生みだす原動力となったものに、両親、兄弟、祖先など、同じ大自然の中に生きた人々を忘れることはできない。

馬篭随一の名門

島崎氏の家系図を見ると、その先祖は、相州（神奈川県）の三浦氏であったことがわかる。このことは、藤村自身が『夜明け前』の中で詳しく書いている。

島崎氏を名告った初代は監物という人で、『平家物語』で有名な木曽義仲の子孫木曽義在に仕え、物頭という、いわば小隊長のような役目を司どる武士であった。彼は初め木曽福島に居住したが、のち馬篭の隣村妻篭に移った。初めて馬篭に住んだのはその長男重通で、砦の守将であった。これが、馬篭の島崎氏の初代である。いずれも十六世紀、戦国の世の出来事であった。

その後、重通は木曽氏を離れて徳川氏につき、馬篭の代官に任ぜられ、問屋も兼ねた。間もなく代官は廃

止になったが、十代目の勝通の時に本陣、庄屋、問屋の三役を兼ねるようになった。これが十七代目正樹まで続いて明治維新をむかえた。この十七代目正樹が藤村の父である。

以上でもわかるように、島崎氏は、封建武士から郷士となって土着した家柄である。しかも、その祖先が馬篭を開いて、田畑山林の大半を所有していた上に、代官、庄屋、本陣、問屋など村の重職をあわせ持っていたところから、土地における政治力と財政力、またそれに伴う村民の信望は絶対的な威力があったといわれている。それは、一言するまでもなく、正樹の時代まで続いていた。寛永十六年（一六三九）の大火で焼失するまでの代官屋敷、明治二十八年（一八九五）の大火で焼失するまでの本陣屋敷は、まさに周囲の寒村を威圧する豪勢なものであったといわれている。このうち、本陣屋敷は藤村が幼年時代を故郷で過ごしたころはそのまま残っていたから、多分記憶にあったことであろう。

両親・兄弟

父正樹はたいへん学問好きの人であった。これは、藤村もしばしば物語っているところである。しかし、島崎氏では、十二代目のころから代々俳句をたしなんでいて、これが藤村の血につながっているように思われるが、好学の精神を伝えた氏族であったという記録はない。だから、正樹の学問はほとんどが独学であった。しかも、村の少年たちの遊びから遠ざかって、ただひたすらに学んだ挙句に、十六歳の時に自ら寺小屋を開いたというのだからたいしたものである。それまで、馬篭には満足な寺小屋すらなかった。この寺小屋は明治五年まで続けられた。また、平田派の国学を学んで神道に心酔し、平田

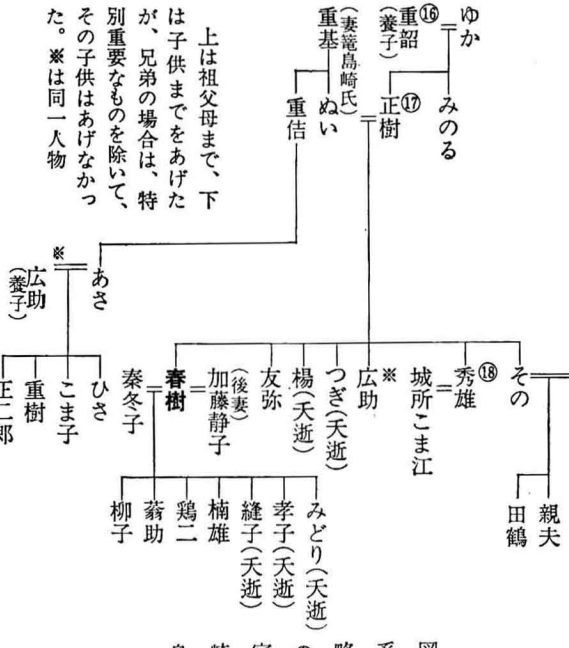
篤胤の養子鉄胤の門下にも加わった。そして、その日本古来の古典的哲学を自己の信条として一生を通した。

きわめて厳格な、信心深い人で、子供たちにとっては熱心な教育者であったといわれているが、藤村の本名の春樹は、ちょうど庭に咲いていた椿にちなんでつけた名であるという逸話が残っているほどであるから、かなりの風流人でもあったらしい。事実、正樹の作った和歌もずいぶん残っている。

正樹は、文久二年（一八六二）幕末の騒然とした社会情勢の中で、父の隠居によって家督を相続した。もちろん、庄屋、本陣、問屋を兼ねていたが、理想家肌で世故にうとかった彼は、年々財産を減らして行くうち、ついに明治維新に遭遇したのである。その上、明治二年から四年にかけて、庄屋も、本陣も問屋も廃止されると、彼にはただ、戸長という村の代表者にすぎない、廃藩置県による新しい役職が与えられたのみであった。しかし、これも健康の都合などで免職になると、彼は自ら神主となって飛騨の山中に赴いた。家運は、すでに傾きつくそうとしていた。

ちょうど、明治五年に春樹が生まれる前後のことであった。当時、正樹は四十三歳であった。母はぬいといって、妻篭に住む同じ島崎氏の一族であったが、当時三十六歳、二人の間には三男三女があったから、春樹はその末子、四男として生まれたのであった。長女をその、長男を秀雄、次男を広助、次女をつぎ、三女を楊、三男を友弥といったが、次女つぎと三女楊は夭逝した。

長女そのは、父親似の理性的な女性であったといわれ、藤村が、肉親中で最も敬愛した姉である。幼いこ



島崎家の略系図

ろから読み書きに励み、文学的素養もあって、藤村自身、自分の文学のよき理解者であったと語っているが、晩年は、精神分裂症にかかって脳病院に余生をすごし、その生涯は不幸であった。春樹が二歳の時に嫁に行ったので、彼が物心ついたころはもう他家の人であった。『ある女の生涯』は、この女性をモデルにした作品である。

長男秀雄は、明治七年、そのが嫁いだ年に父のあとを継ぎ、傾いた家運をたてなおそうと努力をかさね、県会議員に当選したこともあるが、父同様世故にうとく、色々な事業に失敗をくり返し、ついに不遇の一生を終わった人である。情熱的な善人であったが、そのためにかえって他人に欺かれ易く、高すぎる理想に現実が伴わなかった

ので失敗をくり返したのだともいわれている。

次男広助は、三歳の時に母の兄島崎重佶の養子となった人であり、明治十四年二十一歳の時から、木曽の山林問題の総代となって活躍したことで有名である。山林問題というのは、明治新政府が木曽の民有林までも官有林として無償でとりあげてしまおうとした処置に対する、地元民の反対運動のことである。なかば山林にたよって生計を営んでいた人々にとって、これは生命にかかわる大問題であったから、皆真剣にならざるをえなかった。彼は、この問題の解決に約二十年の月日を費やした。そして明治三十八年、ついに山林は総額二十四万円で買いあげられることになったのである。米一升が二十銭たらずだった時代であるから、現在の金額になおすと一億円前後にもなろうか。彼の生涯は貧しかったが、潔白で一本気な、男らしい人物であったといわれる。

三男友弥は、春樹より三つ年長であったが、少年時代に身を持ちくずし、遊蕩と病毒のために、明治四十四年、人生なかばにして不遇の一生を閉じた。しかし、母の不倫の子であると伝えられ、暗い秘密をもつ身のうえは、同情すべき面も多かったようである。佐佐木信綱の門下に加わって、和歌を詠むことを苦しい気持を和らげる唯一の手段としていた。藤村を除いた一族の中では、彼の作る歌が最も文学的にすぐれていた。

さて、以上、簡単に説明した両親や兄弟たちは、これからも時々出てくるはずであるが、ここではまず、彼らの血に、木曽の自然で養われた厳格で素朴で物怖じしない気象が流れていたこと、その上に、文学的な

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert